

東松島復興推進員だより（第 22 号）

～地を往きて走らず～

■インターンによる地域復興推進員へのインタビュー

JICA 東北支部でのインターンシップで、JICA の復興支援事業について学んでいます宮城大学事業構想学部の中川知帆子です。インターンシップの中では実際に東松島市を訪れました。本推進員だよりでは取材したことを紹介させていただきます。

JICA は震災直後より、震災復興モデル事業の取り組みの一つとして東松島市に地域復興推進員を派遣しており、青年海外協力隊として活動した経歴を持つ方の着任されています。現在は、齊藤弘紀推進員と秋山千恵推進員が派遣されています。そこで、青年海外協力隊での活動と現在の活動の関連性や地域の方々との関わり方について取材を行いました。

<東松島市について>



まず、お2人が活動している東松島市について紹介します。東松島市は2005年に矢本町と鳴瀬町の合併により誕生しました。地図を見てわかるように宮城県中部沿岸に位置しており、仙台駅からはJRを利用して最短40分ほどです。2011年3月11日に起きた東日本大震災では甚大な被害をこうむり、1000人を超える方が犠牲になりました。また、「一般社団法人東松島みらいとし機構（愛称：HOPE）が設立されたことにより、「環境未来都市」としての取り組みを含んだ復興事業を進めています。

東松島市の中でも齊藤推進員は野蒜、秋山推進員は宮戸を拠点に活動しています。

<齊藤推進員へのインタビュー>

齊藤推進員は青年海外協力隊員として2年間エチオピアでPCインストラクターとして活動したのち、地域復興推進員となりました。震災時は仙台市で仕事をしながらボランティア活動に従事し、「東北で何かしたい！」という思いが強くなりました。そこで、まずいろいろなところへ行って経験をすることが重要だと考え、エチオピアへ行くことを決意しました。青年海外協力隊の活動で培った我慢強さや環境の違いへの適応力は、地域復興推進員としての活動に活かされているとおっしゃっていました。



齊藤推進員



齊藤推進員が拠点とする野蒜市民センター



齊藤推進員のデスク

どのように地域に溶け込んでいったのかお聞きしたところ「まだ溶け込めていない」と話しつつ、「エチオピアのときも今回の復興支援事業も活動できる期間は決まっており、いずれ自分はいなくなってしまうことから距離感を見るようにしている」と語ります。地域復興推進員に着任する以前は、東松島市に知り合いはいませんでした。現在では近すぎず遠すぎずということを中心に、地域の方々や JICA 以外の団体の方とのつながりを大切にしているとのことでした。

また、エチオピアでは言葉が通じずコミュニケーションに困ったり、文化の違いに戸惑ったりすることがあったそうですが、言葉がわからないからこそ何でも伝えることができ、文化的にも他人を許す風潮があったそうです。一方、野蒜では言葉は通じ、文化も大体同じなのでそのような苦労はありませんが、日本人特有の本音と建前の存在に気を配っているそうです。

齊藤推進員は現在、野蒜の仮設住宅で住民の方々と暮らしています。地域の方々にとって外部者でありながら支援者であり、住民であるという立場を今でもよく考えているそうです。

<秋山推進員へのインタビュー>

秋山推進員は青年海外協力隊員として2年間ルワンダで活動したのち、地域復興推進員となりました。震災時は神奈川県に大学に通っており、東日本大震災を経験していません。大学卒業後、「途上国の人のために何かしたい!」と考えルワンダへ。ルワンダで東日本大震災のことを心配してくれる人が多かったこと、自分も何か役に立つことがしたいと思ったことから地域復興推進員になりました。住民の方々と一緒にコミュニティの形成・活性化に取り組む、そして人付き合いが重視される点がルワンダでも宮戸でも共通するとおっしゃっていました。



秋山推進員



秋山推進員が運営支援をする
げんちゃんハウス



宮戸の魅力あふれる
げんちゃんハウスの穴子ランチ

どのように地域に溶け込んでいったか、お聞きしたところ「活動に助言し、協力をしてくれる『地域のキーパーソン』を探している」とおっしゃっていました。やみくもに進むのではなく、市民センターやげんちゃんハウス、前任の推進員を通して地域の人々と少しずつ関わっていると云います。また、活動の中で常に真ん中にいることを心がけているそうです。例えば、市役所と地域の方々のように行政と住民では意見が分かれてしまうことがあります。その時に、どちらかに入り込むのではなく「どうしてこう思うのだろう？」と両者の意見に耳を傾けるようにしています。齊藤推進員もおっしゃっていましたが、日本人は本音と建前が違うことがあるので、言葉の持つ意味について考えるともお話していました。

地域復興推進員に着任し、1年が経ちましたがまだまだ知らないことはたくさんあるのでもっと知りたいとおっしゃっていました。

<インタビューを終えて>

インターンシップの中では実際に東松島市を訪れ、2人の地域復興推進員の方からお話を聞くことができました。私は、青年海外協力隊に参加した経歴を持つ方々がなぜ地域復興推進員になったのか興味があり、両活動の関連性や地域の方々との関わり方について主にお聞きしました。途上国でも野蒜・宮戸でも、地域に入りコミュニティの形成・活性化に関わるという点は共通しており、お二人は青年海外協力隊としての経験を活かして現在の活動に取り組まれているということがわかりました。ご苦労もあるかと思いますが、実際にお二人にお会いして感じたことはとても楽しそうにしているということです。地域の方々との交流を大切にしながら、外からの目線で野蒜・宮戸について考えてい

ると思いました。

また震災後、東松島市へ行くのは今回が初めてでした。小さなころ海水浴で訪れた野蒜は姿を変えており、驚きました。しかし、住民の方々は前へ進もうとしており、自分たちでコミュニティを再生していこうという思いを持たれていることがインタビューから伝わってきました。宮戸へ行ったのはこの視察が初めてでしたが、海に囲まれた美しい地域だと感じました。また住民の方々は新しいことにチャレンジしていこうという思いがあることがわかりました。

最後になりましたが、今回取材をさせていただいた齊藤推進員、秋山推進員そして野蒜、宮戸のみなさんありがとうございました。今後のご活躍をお祈り申し上げます。

JICA 東北支部 インターン 宮城大学 中川知帆子

【推進員だよりバックナンバー：JICA 東北ホームページ】

<http://www.jica.go.jp/tohoku/enterprise/shinsai/index.html>

以上

JICA は、宮城県、東松島市、宮城大学、東松島まちづくり応援団(NPO)等と共同で「地域復興推進員」を通じた震災復興モデル事業を東松島市で開始しました。このモデル事業では、早期震災復興につながる”市民協働のまちづくり”を支援することを目指しています。ここで得られた教訓や経験を将来の国際協力に繋ぎます。
